

2024 年 1 月 7 日 主日礼拝・新年礼拝 降誕節 第 2 主日

説教題：「新年に聴く御言葉」 聖書箇所：イザヤ書 40 章 1-8 節（1123 頁）

ペトロの手紙 I 1 章 22 - 25 節（429 頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌 93 - 1 - 24 交読詩編：第 100 編 1 - 5 節（109 頁）

讃美歌：83（聖なるかな）／11（感謝に満ちて）265（天なる神には）／78（わが主よ、ここに集い）／27

「今週の聖句」〔しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。〕これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。〕（ペトロの手紙 I 1：25）

「牧師室の窓」「新春に御言葉杖（つえ）にこの世にて生くと誓いて心は軽し」

「人々に新しき年与えたる神の計画私も一步を」

**(始めに)**礼拝説教を始める前に一言申し上げます。本日は新年礼拝であり、通常であれば、新年おめでとうございますとの挨拶で始めるところですが、元日の夕方に起きました能登半島地震により多くの人命が失われ、家屋や道路などの崩壊、火災による被害がありました。死亡された方々、ご家族・ご親族に哀悼の意を捧げます。災害に遭われた方々にお見舞いを申し上げます。避難生活での不具合が減少し、復旧が為されますようにとお祈りいたします。

ではこれから新年の主日礼拝を始めます。

**(1)**皆様おはようございます。本日は 2024 年の初めての礼拝となります。2024 年と言うのは、2000 年に始まった 21 世紀になってから 25 年目に当たります。21 世紀の 1/4（4 分の 1）が経過することになります。この四半世紀の間に私たちの身の周りは大きく変化してきました。地球温暖化、地域戦争の数多くの発生、また、世界的な食料不足が懸念されています。日本の社会の構造も変化し不安定になっています。今日の聖書箇所、ペトロの手紙 I（即ち、ペテロ前書）の 1 章 25 節には「(1:25)しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」と書かれています。そのことの意味を皆様と共に尋ねて参りましょう。

**(2)**今日の聖書箇所は旧約聖書イザヤ書 40 章の始めの箇所を、加えて、新約聖書ペトロの手紙 I（ペテロ前書）の 1 章の最後の箇所を先程、司式者に朗読していただきました。イザヤ書は全部で 66 章ありますが、少なくとも 3 人のイザヤが異なる時代に主の言葉を人々に語り伝えたとされています。今日の聖書箇所を含めた 40 章～55 章は第 2 イザヤと呼ばれている箇所です。今から約 2 千 6 百年前にユダ王国はバビロニア帝国との戦争に負けて、主だった人々は約 1 千 km も離れたバビロニア帝国の首都であるバビロンに強制移住させられました。そこでの移住生活は約 50 年間になります。それをバビロン捕囚と言います。併し、その 50 年間に国際状況が大きく変わってゆきました。バビロニア帝国はペルシャ帝国によって滅ぼされ、強制移住をさせられていたユダヤ人たちは解放されて、故国に帰ることを認められたのです。第 2 イザヤはバビロン捕囚が終わる前後の不透明な時代に、そして、解放されるかも知れないと言う微かな希望が生まれる時代

に、主の御言葉を語った預言者であります。

(3)バビロン捕囚の期間が約50年間と申し上げましたが、皆様は50年間をどの様に理解されるでしょうか。90歳の人には50年前は40歳の働き盛りの年齢です。70歳の人には20歳の若者であり、50歳の人には誕生前後であり、30歳の人には生まれる20年も前になります。この南板橋教会は1953年に設立されまして、昨年の4月に70年になりました。私は昨年の3月に受洗50年が経過しました。受洗してからの年数と言うのは年数の経過の長さであること以上に「主の言葉は永遠に変わることがない」ということを人生の中で、生活の中で、実感すること、噛み締めていく期間のことでもあります。言葉を変えて言いますと「主の言葉は永遠に変わることがない」ということを証しして行くことでもあります。「証し」をするというのは、不透明な人生を過ごしつつも「能動的に生きる」ということに他なりません。

…そのことを第2イザヤは8節で次の様に示しています。〔(40:8) 草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。〕と言っているのです。では、「草は枯れ、花はしぼむが」ということの意味は何でしょうか。その意味は40章の6節7節に書かれています。

「(40:6)呼びかけよ、と声は言う。わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。/(40:7)草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。」ここに書かれている「肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの」この様に書かれていることは、人間を軽んじていることでも否定していることでもありません。何故ならば、今日の聖書箇所 of 終わりである40章8節の次ある9節と11節には何と書かれているのでしょうか。そこには〔(40:9)高い山に登れ/良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ/良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな/ユダの町々に告げよ。見よ。あなたたちの神/…(40:11)主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め/小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。〕ここに書かれている「良い知らせ」とは、福音であり、神の救いが来る・神の国が実現するということです。

…この第2イザヤ書が書かれた時代は紀元前540年頃と推定されています。今から約2500年以上も前の時代です。そんなにも前からこのような希望が生まれていたのです。その希望は現在に至るまで引き継がれてきたのです。私たちクリスチャンはその延長線上に、系譜に、生きているのです。

(4)では引き続いて、本日のもう一つの聖書箇所である新約聖書の「ペトロの手紙Ⅰ」（省略して、ペテロ前書と言いますが）そのⅠ章22節～25節を見てみましょう。このうち24節～25節の前半までは本日の旧約聖書イザヤ書の40章7節8節を引用しています。ここでも読み方として注意をしなければならないことがあります。それは「人は皆、草のようで、……草は枯れ、／花は散る」従って、「人間は無力である」と読んでしまってもいけないのです。その様に否定的に読む

人がおります。重要なことは「しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」これが重要なのです。「しかし」という言葉は大切です。人生という現実がどの様であっても、「しかし」とは、あなた自身はどの様に考えるのかと、問われた時に、あなたは答えなければならないのです。

…ここで、クイズと言いますか、練習問題をしてみますので、お聞きください。今日のペテロ前書の箇所と同じページの上の段に「小見出し」で「聖なる生活をしよう」と書かれている最初の文章ですが、そう 13 節をご覧ください。〔(ペテロ前書 1:13)だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。〕ここに「ひたすら待ち望みなさい」と書かれています。皆様はこの箇所をどの様に読みますでしょうか。待つということは受け身の状態の様に感じられますが、この 13 節の待つという行為・行動は受け身ではなく、積極的な行動です。この 13 節には「いつでも心を引き締め、身を慎んで、恵みを、ひたすら」と書かれています。…私自身の体験を申し上げますと、若い時に職場の上司から教えられたことが「待つ」ということでした。それは「柿の実が熟してくるのを只管に待ち、時の経過を見定めなさい」ということでした。担当している会社を分析し、その会社の経営者や従業員の物の考え方や能力やチャレンジ精神を見定めるには、君自身がしっかりと勉強しなくてはならないと教えられました。

…話を元に戻しますと、聖書には「待つ」ということが大きなテーマになっているのです。「御子の誕生を待つ」「聖霊が降るのを待つ」「神の国を待つ」などなどです。でも注意をしなければいけないことがあります。それは「信じて待つ」ということです。それを信仰と言います。私たちは信仰というパスポートを心の中に持っているのです。パスポートは洗礼によって受け取ります。併し、それをどの様に使うかは異なります。

(5)その信仰というパスポートをどの様に使うかを具体的に説明しているのが、本日の聖書箇所であるペテロ前書 1 章 22 節 23 節です。〔(ペテロ前書 1:22)あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。/(1:23)あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることにない生きた言葉によって新たに生まれたのです。〕この 2 つの節に書かれている御言葉を皆様はどの様に受け止められるでしょうか。私ならば「朽ちない種」「生きた言葉」「新たに生まれた」を選びます。この中の「朽ちない種」とは何でしょうか。この世の自然界の中にそのようなものは存在しません。併し乍ら、自然界には存在しなくても人間の社会には存在するのです。5 百年以上も前に第 2 イザヤが語っていた「神の言葉はとこしえに立つ」という言葉が生きていたのです。ペテロ前書の 1 章 24 節 25 節をもう一度改めて見てみましょう。〔(1:24)こう言われているからです。「人は皆、草のようで、／その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、／花は散る。/(1:25)しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」〕…なぜ 5 百年以上も前の言葉がここに記されているのでしょうか。それは、ペテロ前書が書かれた時代背景にあります。この

ペテロ前書が書かれたのは西暦 90 年前後であり、教会は、クリスチャンは、ローマ帝国当局によって激しい弾圧を受けていました。この手紙の著者はこの試練が信仰を育てる、磨きをかける、「本物と証明される」と伝えているのです。そして、苦難の中にあるクリスチャンたちに希望の灯し火を示しているのです。現代の恵まれた生活の状況から、温かいスープを飲みながら、聖書の一言一句を表面的に読んで批判する人たちがいますが、聖書の現場に入り登場人物の一人として、南板橋教会から派遣された報道記者の一員として深く考えることが重要と私は思います。

(6) 2024 年の新年を迎えました。私たちの周りにはウクライナや中近東、などなどで命が奪われる戦争が起きており、大きな災害や事故・事件により人々の幸せが失われています。これらの状況の中でクリスチャンはどの様に生きるべきなのか。分からないことだらけですが、ペテロ前書は 2 章 12 節(430 頁)で「〔(2:12) 異教徒の間で立派に生活をしなさい。〕」と身近なことで応援しています。また、4 章 10 節(433 頁)では「〔(4:10)あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。〕」ここに書かれている様に「互いに仕え」ることが、そして、「〔(1:25)しかし、主の言葉は永遠に変わることがない〕」それが「新年に聴く御言葉」になることでしょう。

皆様の 2024 年が良い祈りの 1 年でありますように。

・・・お祈りいたします。

〔新共同訳(イザヤ書 40:1)慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる。／(40:2) エルサレムの心に語りかけ／彼女に呼びかけよ／苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを／主の御手から受けた、と。／(40:3)呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。／(40:4)谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。／(40:5)主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る。主の口がこう宣言される。／(40:6)呼びかけよ、と声は言う。わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。／(40:7)草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。／(40:8) 草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。〕

〔新共同訳(ペトロの手紙 I 1:22)あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。／(1:23)あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです。／(1:24)こう言われているからです。「人は皆、草のようで、／その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、／花は散る。／(1:25)しかし、主の言葉は永遠に変わること

がない。」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。」